

美術の形態の變遷にも同様に現はれて居るのを見る事になるのである。眞に科學的な方法で、印度美術發達の跡を溯る爲には、凡ての自然科學に於けるが如く、極めて質實に、我々の得てゐる材料を分類し、之に解明を試みて其の年代順に整へて行く事になる。即ち、之等の材料が自身に現はしてゐる所に従つてゆかうとするものであつて、その材料の示す所は、之を見るあらゆる公平な着者を信服せしむるに足る程、明かなものがあると思ふ。

一起源

こゝに於て、思ひ切つて先づ二千四百餘年の昔、恒河流域の北方で、佛陀の沙羅樹下入涅槃の時代に溯つて考へて見よう。そこで、世尊涅槃直後の出來事を語る必要があるが、之を諸君に説く爲ではない。世尊入滅の噂は忽ち四方に傳はつて、近隣の諸王が七人までも、鉾を手にして拘尸那竭羅に馳せ來つて遺骨の分配を求めた程であつたが、幸にして事なきを得て、共同分割に與つた八王が、各印度の習俗に倣つて半球狀の遺骨塔を建立したのである。